

伝道書

本書はヘブレオ原典ではコヘレトと称せられているが、これは「呼ばわる声」という意味であつて、七十人訳ではエクレジアステス (*Eκλησιαστής*) すなわち「伝道者」というギリシヤ語に訳してある。本文においても(一。一、一一。一二・九。)、筆者はそう自称している。多くの人は本一・一を根拠として、著者はサロモンであるとしている。しかし文体および内容を見ればもつと後代、すなわち三世紀に入る頃のものであることがわかる。著者がダヴィドの子と自称していることは、世俗文学においてもしばしば見られたように、作者が自説を有名な人の口を借りて説いた者とすれば、説明がつく。

本書は、新約聖書中にも一向引用してないけれども、聖会は最初からこれを正典の内に加えて來た。

第一章

この世の物事はすべて空なり

一ダヴィードの子にしてイエルサレムの王なる伝道者の
言ことば二伝道者云いけるは、空くうの空くうなるかな、空くうの空くうなり
るかな、すべて空くうなり。三ひ日したの下に劳苦してなす諸すての

第一章 (1)ヘブレオ語ではヘベル、
すなわち「氣息」、少しも跡の残ら
ぬもの。「空の空」とはヘブレオ
語の言い方で最上級。

働きは、彼にとりて何の益があらん。四世代は去り、世代は来れど、地は永久に存し、五日昇りては沈み、旧の処に帰りては復其処より出で、六回りて南を経ては北に向かう。風は進みてすべての処を経めぐり、またその回る路に帰る。セ河は皆海に入れども、海は溢れず。河はその出で来れる処に帰りて復流るるなり。八万の物は難し、人之を言もて説明すこと能わず。目は見るに飽くことなく、耳は聞くに満足ることなし。九前にありたる物は何ぞ。そは後にも亦あるべし、前に成りし事は何ぞ。そは後にも亦成るべし。²⁾一〇日の下に新しき物なし、また誰も『視よ、是は新し』と云う能わず、蓋は我等の前にありし世々に、曾て既にありたればなり。二前の事の記憶はあらず、後に起るべき事どもも、遅れて出する者には記憶せらるることながらん。二我伝道者は、イエルサレムにありてイスラエルの王なりしが、二日の下に行わるるすべての事を、智慧もて探ね究めんと、³⁾わが心に思ひ定めたり。この労多き仕事は、天主が之によりて仕込まんとて、人の子等に与え給いし

2) なにも自分の本質以上のものはなることはできぬ。
3) 人間の智慧で永続する幸福を見出すことができるか試して見よう。

一四 ものなり。④ 一四 我は日したに行おこなわるる諸々の事ことを見たり、されど

見みよ、すべては空くうにして心こころを悩なやますのみ。一五 曲まがれる者は直なまくする

に難かたく、愚おろかなる者の数かずは限かぎりもなし。一六 我わが心こころの中に語かたりて云いえ

り、〃見みよ、我われは偉大いだいなる者ものとなれり、智慧ちえは我われより前にイエル

サレムにありしすべての者ものに超こえたり。また我智慧わからぢえもて心こころに多く

の事を思おもい廻めぐらし、得とこうる所ところありき。一七 我われ、心こころを傾注そそぎて聰明さとりと教おしえ

と、迷妄まよいと痴愚おろかとを知しらんとしたり、されど是等これらも亦心こころを苦しめ

悩なやますものなるを了さとれり、一八 そは智慧多き時は不興ふきょうを覺おぼゆること

多く、知識ちしきを増ます者は心勞しんろうをも増せばなり。⑤

第二章

快樂、富、及びこの世の事業の空なること

一 我われわが心中こころうちに云いいけらく、〃我われ行ゆきて快樂かいらくを満喫まんきつし、幸福こうふくを得えん。〃と、されど是これも亦空またくうなることを見たり。二 我われは笑わらいを

4) 人祖が罪を犯してからは、不足不自由が天主おん懲らしめの方法になつてゐる。一五 どれほど智慧を得るに努力しても、十分な満足を与えるものが得られないと惜つて遺憾に思うのは、ほかならぬ賢人その人。

第二章 1) 現世の財物や快樂によつて、永続

三

迷妄と思ひ、歡樂に云いぬ、『汝何とて空しく欺くものなるぞ』と。²⁾ ³⁾ 我は人の子等に益あること、その生涯に亘りて日の下に為すべきことを了るまでは、わが心を智慧³⁾に向かわしめ、愚なることを避けんとて、葡萄酒より己が身を退かんと、わが心の中に思ひたり。四) 我は大なる事業をなせり、即ちわが為に館を建て、葡萄烟を造り、五庭園と果樹園とを設け、其処にあらゆる種類の樹を植え、六)またわが為に水を溜めおく所を設え、以て生い出でたる樹々の林に灌ぐ用に宛てたり。七) 我は僕婢を得、家人多く、牛の群、羊の大なる群を有つこと、我より前にイエルサレムにありしすべての人を凌げり。八) 我はわが為に銀、金及び諸王、諸国の資財を積み、男女の歌手を抱え、人の子等の快樂となすもの、また杯ならびに葡萄酒を注ぐに用うる器具をも備えたり。九) かくの如く、我富にかけては我より前にイエルサレムにありしすべての人を凌ぎ、わが智慧また常にわが身に添い居たりき。一〇) 凡そわが眼の欲む所我之を斥けず、わが心があらゆる快樂

する幸福が得られるかどうか、試みて見よう。一) 官能の快樂は空しいものであることがわかる。二) 企業の榮耀榮華に財物、うわべの幸福が得られるか試してみる。

を味い、わが備えしものによりて喜悦を得ること、我之を禁めざりき。しかして我は己が勞苦して得たる所を用うるは、是わが分なりと思ひ居たるなり。一されどわが手に為したるあらゆる事業及びわが空しく汗したる労苦を顧みし時、すべて空にして心を恼ますのみなること、また日の下に永続するものなきことを了りぬ。ニ我更に進みて、智慧と迷妄と痴愚とを觀たり。（我云えらく、抑々人は何者なれば、その創造主⁴⁾なる王に従うを得るやと）一かくて我、光の闇に異なるほど、智慧の痴愚に優れるを得るやぬ。一四賢き者の眼はその頭にあり、愚なる者は暗闇を歩む、されど我はこの両者ながら同じく死すべきを知れり。⁵⁾一五我わが心の中⁶⁾に云いけらく、『もし愚者の死とわが死と同一ならんには、我更に智慧を究めんと勉むるも何の益かあらん。』と。我かくわが心のと語りて、是も亦空なることを了りぬ。⁶⁾一六夫れ、賢き者も愚な

4) ヘブレオ語本になし
 多分聖ヒエロニモが説明のため書き加えたのであるう。ヴルガタによれば、「真理の探究および眞偽の区別は、ただ『万物の創造主』である天主のみもとににおいてのみ、完全にできる」という意味。ヘブレオ語本の意味は、「今⁷⁾の王のあとを嗣ぐ人は、どんなことをするだろうか」。⁸⁾一六節参照。一⁹⁾すなわち世俗的な智慧を求めることも。

る者と等しく、いつまでも記憶せらるることはあらじ、後より来る時は、一切を悉く忘れしむるなり。学者も無学なる者と同じく死す。^レされば我はひ日の下なる万の事の悪しく、すべて空にして心を悩ますのみなるを見るに及び、わが生を厭えり。^レまた我は日の下にてわが熱心に劳苦して働きたるそ^ナの勤勉を悉く恨む、そはわが後を嗣ぐ者^アあらんも、^レその賢き者なりや、将愚かなる者なりやは我之を知らざればなり。しかも彼はわが汗してなし心を勞してなしたるすべての苦心の事業を掌るに至らん。かくも空しきことまたあらんや。^レ是故に我はやめ、わが心最早日の下にて劳することを拒めり。^レ蓋し、人智慧と知識と心労とを以て働き、その得たる所を怠惰なる人に遺さば、是も亦空にして大いに悪しき事なり。^レ抑々人は日の下にて自分を苦しむる諸々の労作と心配とより、何の益をか得ん。^レその何れの日にも憂苦と悲惨とに満ち、夜さえも心の休まることなし。是も亦空ならずや。^レ寧ろ飲食し、且^ア己が勞して得たる所を以て己が心を楽しましむることこそ善か

⁷⁾本書の前書き中に述べた如く、著者はサロモンの名を借りているのである。この後継者とはロボアムをさす。

らずや。⁸⁾ 是も亦天主の御手より来る。

^{二五}誰か我の如く美食し歡樂に溢るる者あ

らん。⁹⁾ ^{二六}天主は御眼に善しと見ゆる人

に、智慧と知識と歡喜とを与え給えり、

されど罪人には積み且集めんための¹⁰⁾苦

惱と溢るる心配¹¹⁾とを与えて、しかも之

を天主の御心に適う人に与えんとし給えり。然れども是も亦空にして、無益に心

を優すものなり。

⁸⁾ 飲食はここではこの世でしてもいい楽しみを譬えたもの。これらに幸福を求めよとの勧告は、悪くない。天主はこれらを人間の楽しみのため与え給うたから。しかし新約聖書の敬虔の理想は天主を愛する念からこれを犠牲に供せよとのすすめを与えているが、この方が一層すぐれている。

⁹⁾ ヘブレオ本及び七十人訳では、「かれなくして誰か食うことを得ん」。食物をも与え給うたのは天主であるとの意。¹⁰⁾ 本章一八、一九両節参照。¹¹⁾ 人間が心配しすぎるのはむだなこと。

第三章

人間の事は変動恒なし、天主の御攝理に安んじて無益の心配を棄つべし

^{二七}何事にも時あり、天の下なる事はすべてその期に循いて起る。¹²⁾ 生るるにも時

¹³⁾ 第三章 1) 天主がお定めになつた秩序の変わらぬこと。人間はこれをどうすることもできない。

あり、死するにも時あり、植うるにも時あり、植えたる物を抜く
にも時あり。殺すにも時あり、²⁾癒やすにも時あり。殴つにも
時あり、建つるにも時あり、泣くにも時あり、笑うにも時あり。
嘆くにも時あり、躍るにも時あり。五石を抛つにも時あり、之を
集むる³⁾にも時あり。抱くにも時あり、抱くを控うるにも時あり。
得るにも時あり、失うにも時あり。保つにも時あり、棄つ
るにも時あり。裂く⁴⁾にも時あり、縫うにも時あり。黙するに
も時あり、語るにも時あり。八愛の時あり、憎の時あり。戦争の
時あり、平和の時あり。⁵⁾九人その勞苦よりして何の得る所あり
や。一。我是天主が鍛えんとて人の子等に与え給える患難を見た
り。二。彼は万物をその時に当りて善く造り、世界を人々の論ずる
に任せ、かくて人をして、天主の始より終に至るまで為し給える
御業を看破ること能わざらしめ給えり。三。我是知れり、この人生

2) 人間が自由を以て行
うよう定められたこと
でさえ、天主が御攝理
を以て掌り給う。

3) 戰争では、畠を荒ら
すために、これに石を
投げつけた（王下三・
二五）。耕作の際には、
パレスチナの石だらけ
の土地から石を拾い集
めなければならなかつ
た。—4) 服喪のしるし。
創世記三七・二九、三
四など参照。—5) 両方
其一段高い者に司どら
れている。

一三
には樂しみ且善を行ふに優ることなきを。一三蓋し飲食し、己が勞苦によ

りて樂しむ人は、皆之を天主の賜えるによりて得たるなり。⁶⁾ 一四 我は天

主のなし給えるすべての御業の永久に存することを知れり、天主が畏れ

られんとてなし給える所は我等何物をも之に加うること、また之より減

ずること能わず。⁷⁾ 一五 曾て成りし所は今もその従存し、後に有らんもの

は既に有りたり。かく天主は過ぎにし事を復繰返し給う。一六 我日の下に

て、審判する処に惡しき事あり、正義を行う処に不正あるを見たり。

一七 我乃ちわが心の中に云いけらく、ノ天主は義人をも惡人をも審判き

給わん、そはすべての事の時なるべし。ノ⁸⁾ 一八 我また人の子等に就き

て、わが心中に云えり、ノ天主彼等を試して、その畜生の如きことを

之に示し給わん、ノ⁹⁾ と。一九されば人も獸も死するは同一にして、両者の

状共に相等し、人の死する如く、かのものも亦死すべし。皆同じく呼吸

し、人にも何等獸に優る所なし。¹⁰⁾ すべて空に歸す。二〇またいづれも同

6) 本ニ・ニ四參

照。一七 天主の

御稜威の御前に

へりくだつて服

従する。一八 い

かなる行為に対

しても賞罰を受

ける時が来るだ

ろう。一九 これ

は人間の靈魂の

不滅性を否定す

るのでなく、

ただ人のと獸の

と、肉体の死を

くらべただけ。

二

一の所⁽¹⁰⁾に行く。即ち土より出でて皆土に帰るなり。

二 誰かアダムの子等の魂⁽¹¹⁾は上に昇るや、⁽¹¹⁾ 獣の魂⁽¹²⁾は下に降るやを知らん。かくて我は、人にとりて己⁽¹³⁾が業⁽¹⁴⁾を楽しむ⁽¹²⁾に優ることなく、是ぞその分なることを了れり。蓋し誰か人を連れ行きて、その後にあるべき事を知らしむるを得んや。

第四章

人間の悲惨なることの事例

一 我は身を転じて他に向かい、日の下に行わるる暴虐⁽¹⁵⁾と、罪なき者の涙とを見たり。彼等は慰むる者なく、全く助力なくして、その暴力に抗するを得ざりき。是に於いて我生ける者よりも寧ろ死せる者を幸福なりとせり。三されど我はこの両者よりも、未だ生れず、日の下に行わるる悪事を見しことなき者を、更に幸福なりと思えり。四我また人の諸々の労苦を観て、その勤勉は之が隣人の嫉妬⁽¹⁶⁾を招くことに心づきたり。されば是も

⁽¹⁰⁾墓。⁽¹¹⁾この世の生活のいろいろな悲惨をなめてから、靈魂は天主の至福直觀のために昇るか、もしくは死後もなお獸の如く低きに降る。但しこれは獸魂のように無に帰するというのではなく、天主と至福とを失うという意味。⁽¹²⁾勞働や仕事に幸福を見出す。

第四章 ①自分

亦空にして無益に心を労するのみ。愚なる者はその手を拱き、己が肉を喰いて云う、六「安居して片手に満てるは、勞苦し心を悩まして両手に満てるよりもよし。」と。我また観じて、日の下に他の空なる事あるを見出したり。八唯独りにして、他に共に居る者もなく、子弟もなく、しかも労苦するをやめざる者あり、その目は富に飽くことなく、また反省て「我誰の為に労苦してわが心の幸福を奪うや」と云うことをせず。是も亦空にして苦患の甚だしきものなり。九されば一人共に居るは一人居るに優る、蓋は共に居るによりて互に益する所あればなり。一即ち一人倒れんとせば、他の者之を支うべし。されど独りなる者は不幸なるかな、其は倒るとも之を扶け起す者なればなり。二また二人共に臥さば、互に他を温むるを得ん、³⁾ 独りなる者いかにして身を温むるを得んや。三また或者、一人には力優るとも、一人ならば之に抵るを得べし。三重⁴⁾ の繩は容易く断れず。一貧しくして賢き少年は、後

の財産や健康を害して。—²⁾ 共に快く助け合うために、人人と仲間になる。³⁾ 当時のパレスチナでは、貧しい人は上衣を掛布団代りに用いたが、これは冬の寒い時には殊に、身を温める役に立たなかつた。一⁴⁾ 「三」は「いくつか」の意をあらわす整数。

の事を見越して之に備うることを知らざる、老いて愚なる王に
一四 優る。一四夫れ、時として牢獄と鎖とを出でて王位に至る者あり、
一五 また王に生れながら、落魄れて赤貧に至る者あり。一五我はすべ
ての生ける者が、彼に代りて起つべき他の若者⁵⁾と共に、日の
一六 下を歩むを見たり。一六その前にありしすべての民の数は限な
し、されど後に来る者は彼を喜ばじ。一七なお是も亦空にして心
一七 を悩ますものなり。一七汝天主の家に入る時は、その足を守り、
一八 聽かんとて近寄るべし。聴従うは愚なる輩の犠牲に遙かに優
一九 る、そは彼等己がいかなる悪を行ひおるかを知らざればなり。¹⁰⁾

5) 一三節の少年のこと。
6) かつかれが王になつた時これに向かつて歎呼するところの。 17) 心の定まらぬ民はかれを見する。故にかかる榮華は空しいものである。 18) 注意せよ。 9) 慎しんで天主の祭祀にあずかるために。 10) 母上一五・二二。

第五章

言を慎しむこと——誓を果すべきこと——富の屢々有害なること——

なきこと
かるがる
かた
なんじ
こころてんしゆ
みまえ
お
はや
ことば
いた
こと

第五章 1) 天主の御

となかれ。そは、天主は天に在し、汝は地に在ればなり。① されば
汝の言を少からしむべし。ニ 心配多ければ夢従いて生じ、言多き時
は愚なること露われん。三 汝もし天主に何事がを誓いなば、之を果
すことを延ばすなかれ。そは不実にして愚なる約束は、彼に嘉せら
れざればなり。却つて汝の誓いたる事は、何にても之を果すべし。

四 誓いたる後その約したる事を果さざるよりは、誓わざること遙か
に善けれ。五 汝の口をして、汝の身²⁾に罪を犯さしむるなかれ、ま
た天使³⁾の前にて「世に攝理なるものなし」と云うなけれ。恐らく
は天主汝の言を怒り、汝の手の為す所を悉く滅ぼし給わん。六 夢

多き所には、空しき事多く、言際限なし。汝はただ天主を畏れよ。④
汝たとい國の内に貧しき者の虐げらるると、審判の非道なると、
正義の枉げらるると見るとも、その事に驚くなけれ。そは高き者
にまた高き者あり、更に是等より高き者あればなり。八 その上にな

稜威と我らの卑しさとを対比すると、これは当然。一 2) 肉体
は、誓を果たそうともせず、また果たすこともできない。
3) 祈と誓との伝達者
すなわち司祭。他の解釈者の説では、我らの祈りに立ち会う
天使。一 4) この「天主を畏れよ」という文が、ここまでい
ろいろな教訓のしめくくり。

お、己に服う全地を治むる王あり。貪慾なる者は金錢に飽くことなく、富を好む者は之より益を得ざるべし。されば是も亦空なり。一〇資財多き所には之を食む者も亦多かり、されば所有主にとりて、ただその目に資財を見る外には、何の益する所があらん。一一労働く者は、その食する所少きも、はた多きも、睡眠いと快し。されど有り余る富は人をして眠らしめず。一二更に日の下にてわが見たる他の甚だしき不幸あり、そは蓄えたる富のその所有主に害を及ぼすことはなり。一三即ちそは大なる災厄によりて失わることあり、彼子を儲くと雖も、その子はこの上なき窮乏に陥るべし。一四人は裸にてその母の胎を出でしが、またその如くにして帰り行かん、己が労して得たるもの、何一つ身に携え行くこと能わじ。一五即ち悲惨なる不幸は、來りし如くにして帰り行かざることなり。然らば風を執えんとして労苦する者、何の益を受くる所あらんや。一六人はその生くる日の限、暗黒の中にありて、多くの心配の中に、また艱難と悲愁との中に、食するなり。一七されば

5) 金持が子どもを有し、しかも財産を失えば困ることはそれだけひどいわけ。

六百一
提前六
七。

人は天主の己に賜える生命の存する限り、飲食し、且その日の下にて勞苦

したる骨折により歡樂を享くべし、是こそ我に善しと見ゆる事なれ。しか

して又是その分なり。¹⁾ 一八また何人にも、天主が之に富と所有物とを与

え、彼をしてそれによりて食し、且その分を享け、その労苦によりて楽しむ

ことを得しめ給うは、是天主の賜物たるなり。¹⁾ 一九蓋しかかる人は己が生涯

の日を記憶すること多からず、²⁾ そは天主その心に喜悦を満し給えばなり。

第六章

貪慾なる者の不幸なること

一また日の下にてわが見たる他の禍あり、是は人々に屢々起るものなり。

二人あり、天主之に富と所有物と名譽とを賜い、その心の願う所何一つ欠

くるなし、然れども天主彼をしてそれによりて食するを得しめ給わず、他

の人¹⁾之を食い尽すことあるべし。是、空にして大なる悲惨事²⁾なり。

三人たとい百人の子を儲け、多年存えて高齢に及ぶとも、もし其の魂己¹⁾が

7) 本二・二四
参照。一八翌

日のことを心
配しない。マ
テオ六・三四

参照。
テオ六・三四

第六章 1) 本

二・一八、一

九参照。

2) 自然的な立
場から見て。

有てる財を用いることなく、葬らることだになくんば、³⁾ 我この人に就きて断言す、流産の子⁴⁾ 之に優ると。四⁵⁾ 蒼しそは空しく世に来りて闇に去り、その名は全く忘れらるべし。⁶⁾ 是は日の目を見ず、また善惡の差別を知らざりき。⁷⁾ 六人は二千年生存らえて幸を享けざりし場合にも、皆同一の所⁸⁾ に急ぎ行くに非ずや。⁹⁾ 七人の労苦は悉くその口の為なり、されどその靈魂は飽き足らざるべし。¹⁰⁾ 賢き者の愚なる者に優る所何かある。貧しき者も生命のある所に行くによりて、何の優る所あらんや。¹¹⁾ 欲するものを見るは、知らざるものを見むに優れり。¹²⁾ されど是も亦空にして、心の思い上りなり。一〇後にあるべき者も、既にその名命けられたり。そは即ち「人間」にして、その己より強き者¹³⁾ と、審判の時に争うを得ざることは人の知る所なり。¹⁴⁾ 二¹⁵⁾ 詩う時には、甚だ空しき言¹⁶⁾ 多し。¹⁷⁾

³⁾ イスラエルでは盛大に葬式を行なうことをこよなく重んじていた。 ⁴⁾ 本四・三参照。⁵⁾ 墓場。 ⁶⁾ 貧者も富者と同じく生命を有す。 ⁷⁾ ヘブレオ語本「目もて見ることは、欲望もてさまよいあるくに優る」。 ⁸⁾ 天主。 ⁹⁾ 羅九・二〇。 ¹⁰⁾ 事。 ¹¹⁾ 天主を相手にして争うのは不合理千万なこと。

第七章

世間の空しき事に対する教訓——理想的の人間の有無

一
人は已より高き事を求めん為に、何を要するや、然るに彼はその生涯に於いて、そのこの世の旅の日数の中、影の如く過ぎ去る時の間に何が已に益あるかを知らざるなり。また誰か彼に向かいて、その後に日の下にあるべき事を告げ得る者あらん。① 美名は貴き膏に優り、② 死する日は生るる日に優る。③ 哀の家に行くは、酒宴の家に行くに優る。蓋は我等はすべて人の終を想い出し、生ける者も来るべき事を考うればなり。④ 怨怒は笑に優る、⑤ そはその顔の悲しげなるによりて、過失を犯したる者の心矯正さるればなり。五 賢き者の心は悲愁のある所にあり、愚な

第七章 ①ヘブレオ語本及び七十人訳では、本節はまだ第六章に属し、その第十二節になつていて、第七章は二十九節しかない。②ヘブレオ原典にある語の洒落を、語通り訳すと、「よき名（シエーム）はよき油（シェーメン）にまさる」。③傳道者は、愚な享樂をすることと、いつも己を苦しめることとの裡に滅びてゆく生よりも、死をひたすら優れりとしている。一箴二二・一。
④即ち「罪ある者を咎める怒りは、それに迎合する笑いよりもいい」の義。

る者の心は歡樂のある所にあり。六愚なる者の阿謾に欺か
るるよりは、賢き者に譴責めらることよけれ。⁵⁾ それ、
愚なる者の笑は釜の下に燃ゆる茨の音の如し。⁶⁾ されど是
も亦空なり。八暴虐⁷⁾は賢き者をも恼まし、その心の力を
沮喪⁸⁾わしめん。九談話⁸⁾の終は始に優り、堪え忍ぶ者は思
い上る者に優る。一〇怒るに早からざれ、忿怒は愚なる者の
胸に宿ればなり。一一汝、昔の今に優るは何故なりと思う
や。」と云うなかれ。蓋はかくの如き質問は愚なればなり。
一二智慧は富を伴わば更に有用にして、日を見る人を益する
こと大なり。二三蓋し智慧の身を護る如く、金錢も亦身を護
る、されど知識と智慧とは、之を有つ者に生命を与うる点
に於いて勝れたり。⁹⁾ 四天主の御業をその見棄て給える者は
は誰も之を矯正す能わざることを考えよ。¹⁰⁾ 一五幸ある日に

5) 四節と同じ意味。一〇茨は大
きい焰を上げるが、すぐ消える。
7) ヘブレオ語本「暴虐は賢き者
をも愚にする」。即ち己が権力を
悪用して、己が権威もて弱き者
を虐げる人は、それによつて己
の智慧を悉く失つたことを示す
ものである、との意。一〇ブル
ガタの orationis は sermonis の
意味で、これには「事」の意義
もある。一一智慧は一層すぐれ
た生命を得させてくれる。

10) ヘブレオ語本「天主の曲げ給
いし者は誰かこれを直くすること
を得ん」。本一・一五参照。

は幸を楽しみ、予め禍ある日に備えよ、蓋し天主は、人をして

御自分に對して不平を鳴らす正当なる理由を見出さざらしめんた

めに、此をも彼をも作り給えるなり。一六我またわが空しき日に

次の事をも見たり、即ち、義人の義を行いつつ滅ぶるものあり、

悪人の惡を行いつつ長生するもあり。一七汝心なき者とならざら

んために、義しきに過ぐることなかれ、一八また必要以上に賢なる

ことなかれ、一八汝時至らざるに死せざらんために、多くの惡を行

うなかれ、一九汝が正義を擁護するは善し、

しかしてそれより汝の手を引くなかれ、二〇天主を畏るる者は何を

も忽せにすることなればなり。二〇智慧が賢き者に力を添うること

とは、城市的君侯十人に優る。二一夫れ、善のみをなし罪を犯すこと

となき義しき人はこの世にあらざるなり。二二人の云いたるすべて

の言を汝の気に留むるなかれ、然らずば汝恐らくは汝の僕の

11)この世の空しい努力をしていた時に。

12)天主とその御掟とを是非するほど。13)な

んじの罪が大なるに由りて、主の御憐憫を受ける余地がなくならぬよう。14) sed et ab illoを「されどほかの事よりも」と訳す人も

ある。そうすれば、

「しかし天主のなんじに下さる喜びを、しおけることもするな」の意。本五・一八。三

・二二参照。15)王上

八・四六。代下六・三

六。箴二〇・九。約壹

汝を惡しきまに云うを聞くことあらん。三^一蓋し、汝も亦屢々他を惡し
 ざまに云いしことあるは、汝の良心の知る所なり。三^二我は智慧もてす
 べての事を試みたり。我は「智慧を得ん」と云いしが、そは我より遠
 ざかりて、三^三以前よりも遠くなれり。その深きこと甚だし、誰か之を
 見出すを得ん。三^四我はわが心を以てあらゆる事を調べ見たり、これ智
 慧と道理とを知り且考え、求め、また愚なる者の天主を蔑すること
 浅慮なる者の迷妄に陥ることとを知らんためなりき。三^五我は女が死よ
 りも苦きを見出せり、そは狩人の罠にして、その心は網、その手は械
 なればなり。¹⁶⁾ 天主に嘉せらるる者は之を免れん、されど罪人たる者
 は之にかかるん。三^六伝道者云、いけらく、見よ、我は道理を了らん為に、
 彼此思ひ廻らしてこの事を了れり、三^七道理は我¹⁷⁾なお之を求めつゝあ
 れど、未だ見出さず。男子は我千人の中に一人を見出したりとも、婦
 人はその数を尽してついに一人だも見出したることなし。¹⁸⁾ 三^八わが了

一・八。雅三・一。
 16) 箴七十九章におけると同じく、こ
 こでも愚といふ。娼婦が、智慧といふ
 貴婦人と対照してある。傳道者はこ
 こで一般に婦人を悪いと言つてゐる
 のではない。ただかれが悪い女と思
 つてゐる者についてのみ。—17) 原語
 anima mea.

18) 傳道者は人類の
 理想に適う人を求
 めた。そして男よ
 りも人間の氣高い

れるは、天主人を直き者に創
造り給いしに、彼際限もなく
疑問に巻きこまれたること、
ただ是のみ。智者の如き者は
誰ぞや、¹⁹⁾ 言を²⁰⁾ 解くことを
知る者は誰ぞや。

第八章

眞の智慧は天主の誠命を守るにあり——天主の途は究め難し

一人の智慧はその面に輝く、
されど最力ある者その顔を変
じ給うことあるべし。¹⁾ ²⁾ 我は
天主に誓えるによりて、²⁾ 王³⁾
の言と誓とを守る。 ³⁾ 急ぎて

所をその身に具えていそな女にも、樂園で罪がエワから出たことおよび今も女が男を罪に陥れるたよりになつてゐることを、認めずにいられなかつた。キリスト教はこの点においても罪の呪いに打ち勝ち、男の理想たるキリストと、女の典型たるマリアという最も清きお方を人類に与えた。¹⁾ ²⁾ ヘブレオ語本では、この文以下が次章に入つてゐる。¹⁾ ²⁾ 事。

その面前より退くなれ、また惡しき所行を続くるなかれ、そは彼すべてその欲するままになすべければなり。四 その言は權力に満てり、誰もかれに向かいて「汝何とてかくなし給うや」と云うことを得ず。五 命令を守る者は何の災禍にも逢わじ、賢者の心は時と應答と³⁾を弁う。六 いかなる仕事にも時期と好機とあり、⁴⁾人には大なる患難あり。七 そは彼過去の事を知らず、また未来の事はいかなる使者によりても之を知ること能わざればなり。八 気息⁵⁾を留むるは人のなし得る所に非ず、また人は死する日に臨まば力なし、この戦鬪始まるや、彼をして安らかならしむる能わず、悪行の悪人を救うこともなからん。九 我は是等一切の事を觀、ひ日の下にて行わるる諸種の業に心を用いたり、時としては人の人を治むるがその不幸を招くことあり。⁶⁾ 一○ 我は悪人の葬らるるを見たり、彼はなお生きたりし間、聖所に在り、恰も行為義しき人の如く、市にて称えられしなり。されど是も亦空なり。⁷⁾ 二 蓋し、悪に対する判決速かに下くだ

³⁾ 日上に對する
答へとその時期
⁴⁾ 本三・一十八
参照。一⁵⁾ 生命
のものと。一⁶⁾ 主
權者としての權
力を悪用すれば。⁷⁾ ヘブル
オ語本「われ見
しに、悪人の丁
重に葬らるるあ
り、また義を行
う者の聖所を離
れてその町に忘
れらるるあり。
これまた空な
り」。

一三

されざるが故に、人の子等は何の懼もなく悪を行ふなり。一三されどたとい

罪人百度惡をなしながら、忍耐を以て看過さるとも、天主を畏れその御

かお

あが

たびあく

にんたい

も

み

のが

おこな

あく

おこな

おそれ

面を崇むる人々に幸あるべきことを、我は知るなり。一三但し惡しき者には

かお

ひとびと

きち

よ

かわ

み

かお

おそ

やから

やから

やから

幸あらざれ、またその壽命も長からざれ、却つて主の御面を畏れざる輩は

かげ

こと

ナ

ゆ

かえ

しゅ

み

かお

おそ

おそ

み

影の如く過ぎ行けよかし。一四なおまた他にも世に行わるる空しき事あり。

一四

かげ

こと

ナ

かえ

しゅ

み

かお

おそ

おそ

み

義人にして恰も惡人の所行をなしたるが如くに禍のその身に来る者あり、

また惡人にして恰も義人の行為をなしたるが如くに安固なる者あり。され

ど我思うに、是またいとも空なり。一五さればこそ我は歡樂を稱えしなれ、

そは日の下に人にとりて、飲食して楽しむ外に幸福なる事あらざればなり、

實に日の下にて天主の賜える生命の存する間、已が労苦の中より身に附く

べきはただ是のみ。一六我また智慧を知り、世に行わるる營みを了る為に

わが心を用いしが、昼も夜もその眼に睡眠を得ざる人あり。一七我また日の

下にて行わるる天主の諸々の御業は、人の到底その理を了る能わざるもの

一七

一六

一五

一四

一三

一二

一一

一〇

九

八

七

六

五

四

三

二

一

(8) 天主の下さ
る喜びを、感
謝して受けよ
といふ、義人

へのすすめが
本書中に都合

五回、即ち二

・二四。三・
一二以下。五

・一八。九・
七。一一。九

に記してある

これについて
は本書第二章

註八参照。
これが本に記してある
ことは本書第二章
註八参照。

なることを弁うるに至れり。しかして労して求むれば求むるほど、ますますそを見出さざるべし。智者たとい已之を知ると云うとも、之を見出すこと能わざるなり。⁽⁹⁾

第九章

生を楽しむこと——智慧の作用に妨げあり

一 我はわが心にこのすべての事を考へて、明確に了らんとせり。義しき者、賢き者あり、その為す所は天主の御手にあり。¹⁾ 然れども人は己がその愛を受くべき者なりや憎を受くべき者なりや²⁾ を知らず。のみならず、将来の事は悉く不定のままに秘めおかる、そは一切の事は義しき者にも天主を蔑する者にも、善人にも悪人にも、淨き者にも穢れたる者にも、犠牲を献ぐる者にも犠牲を軽んずる者にも、平等に³⁾ 起ればなり。罪人も善人の如

第九章 ①天主の御保護と御指導とを受ける。——②ヘブレオ語本「愛に会うや憎惡に会うやを」。

それでヴルガタのこの言葉を、「人間は自分が聖寵を蒙つてゐる状態にあるか否かを決して確知することができない」と解するのは転義に過ぎない。——③ほかにもわけがあるが、この理由からも、天主はこの世では善人と悪人を混じて置かれる、それは両者を驗し給

⁽⁹⁾ 天主の御攝理の意味を完全に悟ることは、人間には決してできない。

く然り、眞実を誓う者も偽り誓う者の如く然り。三すべての人
 に同じ事起り、人の子等の心その生ける間、惡と輕侮とに満ち、
 後に至りて彼等冥府に下さるるは、日の下に行わるるあらゆる
 事の中にて最も悪しきものなり。四誰も恒に生くる者はあらず、
 またその見込んだにある者もあらず。五生ける人は死せる獅子に
 優る。五六夫れ、生ける者はその死すべきことを知る、されど死
 せる者は最早何事をも知らず。また彼等には最早應報もなし。六
 そは彼等に就きての記憶も忘れらるるに至ればなり。六またそ
 の愛も憎も嫉妬も同時に消え失せて、彼等はこの世と日の下に
 行わるる業とに、何の關係もあらざるなり。七されば行きて
 楽しみつつ汝のパンを食し、喜びつつ汝の葡萄酒を飲め、そは
 汝の所行天主に嘉せらるればなり。八恒に汝の衣服を白からし
 めよ、また汝の頭に油を絶やすなれ。九日の下にて汝に与え

うため。—4 quia と
 unde とは同じ意味で、
 pessimum にかかる。

5さればどんなに悲惨で
 あつても、生はよきもの
 である。一6下記の「記
 憶」は人人の間ににおける
 それで、いわば現世的に
 考えて言つてあるものゆ
 え、「應報」も現世的な
 それをさす。来世の報い
 については、傳道者はこ
 こでまだ詳述しない。

7)幸福と繁榮との象徴。
 また香油を注ぐのも同
 様。

られたる、汝の定めなき生命の存する日の限り、汝の空しき時の間、汝の愛する妻と共に生を樂しめ、⁸⁾ 蓋し是ぞ人生に於いて、また汝が日の下に働く労苦の中にて、汝の受くべきものなる。一〇 凡そ汝の手の為し得る事は、熱心に之を為せ、そは汝の急ぎ行く冥府には、所為も分別も、智慧も知識も、あらざるべければなり。一一我身を転じて他に向かいしに、日の下に於いて、必ずしも蹴走は速き者に、戦争は強き者に、パンは賢き者に帰せず、富は分別ある者に、愛顧は巧みなる者に帰せず、すべて時と偶然とに依るを見たり。一二人は已が終を知らず、ただ魚が釣針にかかる如く、鳥が網にかかる如く、人々も不運の時が俄に襲い来るに逢いて、之にかかるなり。一三我また日の下にて次の事を見しが、そは我に最大なる事と思われたり。一四即ち一つの小さき城市あり、その中に居る人少かりしに、大王來りて之を攻め囲み、その周囲に攻撃の足場を築き、以て包围全くなれり。一五時にその中に貧しけれども賢き一人の人あり、その智慧によりて邑を救いしが、後に至りて誰もその貧しき人を思い出す者なかり

8) 平和な家庭においておいて許されたる樂しみ。

き。茲に於いて我は云えり、智慧は力に優ると。然らば如何にしてこの貧しき人の智慧は軽んぜられ、その言は聽かれざりしや。静かに智者の語る所は、愚なる者等の中に君侯の呼わるよりも、聽かるること多し。智慧は武器に優る、また一つの事に罪を犯す者は、多くの善き事を損わん。

第十章

賢愚、野心、誹謗などに就きて

死する蠅は膏の快き薰を損う。僅少なる束の間の愚行は、智慧と榮誉とを損いてなお足らざることあり。二賢き者の心はその右手にあり、愚なる者の心はその左手にあり。三また愚者はその道を歩む時、己愚者なるが故に、すべての人を愚者と思う。たとい權力ある者の心、汝に對して激昂すとも、汝の処を離るるなかれ、そはかかる用心は最大なる罪を阻止むれば

第十章 ①唯一の過失がこれらを宝を危うくすることは、一びきの蠅が香膏を腐敗させると同様。他の中もあり、「智慧と榮誉とは、僅かなる束の間の愚行よりも貴し」。
②右は善、左は惡。

のある人は本節をキリストのこの世における御生活の有様に結びつける。
③ヘブレオ語本「されど罪を犯すただ一人の者は」。

なり。五日の下にわが見たる一つの禍あり、そは君侯より出ずる誤謬に
由るが如し。六即ち愚なる者高き位に据えられ、富める者低きに坐する
こと、是なり。七我は臣僕が馬に乗り、君侯が臣僕の如く地上を歩むを
見たり。八坑を掘る者は之に陥り、生垣を毀す者は蛇之を咬まん。³⁾
九石を移す者は之によりて痛を受け、木を割る者は蛇之によりて傷を得
ん。一〇鉄もし鉋り、旧の如くならずして鉋くなりなば、大いに骨折りて之
を研がざるべからず。智慧も亦力を尽して後始めて得らるべし。一一蔭に
て誘る者は、密かに咬む蛇に異らず。⁴⁾一二賢き者の口より出する言は恵
なり、されど愚なる者の唇はその身を滅ぼさん。一三その言の始は愚にし
て、その談話の終は甚だしき迷妄なり。⁵⁾一四愚なる者は言を多くす。人は
その前にありし事を知らず、誰か之にその後に来るべき事を告ぐるを得
ん。一五愚者の劳苦は、邑に行ふことを知らざる己を恼ますべし。⁶⁾一六そ
の王が少年にして、その諸侯が朝に食する⁶⁾國よ、汝は禍なるかな。

3) 篇二六・二七。
集二七・二九。

一毒蛇は好んで
石垣の割目に巢

くう。慶五・一
九参照。

一4) ブレオ語本「も
しまじないきか

づば」。一5) 大
道で迷うことが
あるのは、ただ

愚者のみ」とい
うのと似た諺。

6) 政務を執る代
りに。

愚者のみ」とい
うのと似た諺。

6) 政務を執る代
りに。

一七

一七 その王が名門の出にして、その諸侯が逸樂の為に非ず身を
 養う為に、宜き時に食する國は福なるかな。一八 惰るによりて
 棟は下り、手を抜くによりて家は漏るべし。⁷⁾ 一九 人々は笑う
 為にパンと葡萄酒とを造りて、楽しく暮さんとす。何事も金
 次第なり。二〇 汝思念の中にも王を誘るなれ、また密室⁸⁾
 の中にも富める者のことを悪しきまに云うなれ、そは空
 の鳥汝の声を伝え、翼あるもの汝の言を告ぐべければなり。⁹⁾

第十章

青年に対するいましめ

一 過ぎ行く水の上にパンを投げよ、時久しくして汝再び之を得ん。¹⁾ 二 一つの分を七八人²⁾ または八人に与えよ、そ

7) 家そのものが崩壊するまでも、投げやりにしておく
 8) 国が汝の是認できないような状態であつても、無益な批判をすることは慎しめ。それはただ汝を危険に陥れるばかりだから。
 9) 「壁に耳あり」と言うのと同じ。

第十一章 一 節は二節の喻の一例。パンは薄い平たい菓子で容易に河に浮かんで流れゆく。水に沈まぬとは、慈善が決して無駄にならず、必ず報いられ、時としてはこの世からすでに報賞を受けることもあるとの意。¹⁾ 2) ここにもまた、屢々そうであるように、七という完全数が用いてある。

は汝、如何なる災厄の地上にあるべきやを知らざればなり。雲は満

つるに及びて地に雨を注がん。樹は南に倒るるも北に倒るるも、何処

にせよその倒れたる所にあらん。樹は南に倒るるも北に倒るるも、何処

を観る者は決して刈るを得じ。五 汝は雲の来る道の何たるかを知らず

また妊婦の胎内にて如何なる状に骨の繋がるるかを知らず、汝が万物

の創造主に在す天主の御業を知らざるも亦かくの如し。六 朝に汝の種

を播き、夕にもその手を止めるなかれ、そは汝、此と彼と、何れがよく

生長つやを知らざればなり、またもし両者ながら生長たば更によから

ん。七 光は快く、日を見るは目に樂し。八 人たとい多年生存えて、

その間に楽しとするも、暗黒の時⁵を憶うべし、その日は多かるべ

く、その来るや過去の空なること明らかにせられん。九されば若者よ、

汝の青春に当りて楽しめ、汝の若き日に汝の心を幸福ならしめ、汝の

心の赴くままに、汝の眼の見る所に循いて歩め、但その一切に対して

三 雲は満

間の考え方とでどう

することもできな

い法則が、この世

の出来事の多くを

定める。一 自分

の行為の機会の好

し悪しを、あまり

細心に吟味しうさ

ると、何事も行う

ことができなくな

る。二 一説では

「今は知れない老

年の時」、一説で

は「今は知れない

死後の時」である

と言ふ。

天主の汝を審判に引き出し給わんことを知れ

よかし。一。汝の心より忿怒⁶⁾を除き、汝の身

より悪を去れ、蓋は青春も歡樂も空なれば

なり。

第十二章

若き時に天主を憶ゆべし—天主を畏れその誠命を守るべし

一 汝の若き日に汝の創造主を憶えよ、是は惱

の時來り、汝の「そは我を喜ばさず」と云わ

ん年の近づく前に、一日や光や月や星の暗

み、二。雨の後雲の歸る前になすべきなり。

三。その時來らば、家を守る者は戦慄き、強き

人々はよろめき、粉磨²⁾者はその数の少きによ

りて怠り、穴より覗くものは闇に包まれん。2)

6) ヘブレオ語「心配」。1) ヘブレオ語「あけぼの」。即ちこれは青春の象どり。

第十二章

1) 老年になつて視力が衰えること。

2) 老人を、すべての物が古びてゆく家に譬えてある。人が身を護るに用いる腕は颤えるようになり、強壯な人でも年を取ると脚が曲がる。年とつて歯がぬけることを、数少なくなる臼ひき女にたとえてある。

四 しかして人々粉磨の音の低くなる時衢への戸を閉
 し、鳥の声にて起上り、歌の娘等は皆聾となら
 ん。³⁾五彼等はまた高き処を恐れ、道にて愕かん。巴
 旦杏は花咲き、蝗は肥え太り、⁴⁾続隨子⁵⁾の実は落⁶⁾
 ち散らん、そは人その永遠の家に行き、慟哭く者衢
 を徘徊すべきなり。⁶⁾六後に至らば、銀の鎖は断⁷⁾
 いどれ、金の紐は解け、⁷⁾水瓶は泉の側にて碎け、車は
 井戸のほとりにて毀れ。⁸⁾七塵はその出で來りし本の
 土に歸り、靈魂は之を賜いし天主の御許に帰らん。⁹⁾
 八伝道者は云えり、空の空なるかな、すべて空なり
 と。九また伝道者は甚だ賢ければ、民に教えて己が
 為したる所を物語り、探ね究めては數多の箴言を作
 れり。¹⁰⁾彼は益ある言を求め、正しくして真理に

³⁾前節の「穴、すなわち窓より覗くもの」は、兩眼で、ますます衰えゆき、ついには漸次視力を失つてしまふ。また本節の戸は耳で、それが閉じるとは老人の耳が遠くなることを言う。白をひくとは、物を言うことで、パレスチナの家の白の音のように、外部へ音を傳えるが、それもいよいよ弱くなるばかりである。⁴⁾老人は少し高い所でも怖がる。巴旦杏の花は、白くなると落ちる。蝗は動きにくくなると、間もなく死ぬ。⁵⁾「ほるとそう」は茨の種類。⁶⁾葬式およびそのために入葬つた泣き女のことを言う。⁷⁾生命が燈に譬えてある。その銀の鎖が切れると金の「ひざら」が落ちる。⁸⁾人体といふ機械がこわれる。⁹⁾創二・七。¹⁰⁾本書の前書き参照。

満てる語を錄せり。二賢き者の言は刺の如く、また師の勸告によりて一人の牧者(11)より与えられ、深く打ち込まれたる釘の如し。ニわが子よ、是等よりも多くを求むるなれ。書を多く作れば際限なく、思索頻なればその身を病ましむ。一三我等皆諸共に、云われし事の帰結を聽かん。四く、天主を畏れ、その誠命を守れ。蓋し、是ぞ凡そ入たる者の本分なる。一四しかしてその為す所は悉く、善にもあれ惡にもあれ、天主之を審判にかけて、あらゆる過失(12)を引出し給わん。(13)

(11)牧者たちは仕来りによつて木のとげで馬を打ちこれを驅ることや、天幕の杭(釘)を打ちこむことをよく知つていた。一(12)ヘブレオ語本「隠れたるすべてのことにつ就きて。天主の審判はいと祕められたる事にまでも及ばん」。一(13)一切に対する天主の御正義を引合いに出して、この世の濁つてゐること空なること、正義の行なわれぬことを、終始悲しみ嘆いて來たこの書の、結びとしている。

